

## カール・バルト『ローマ書（一九三二年版）』に見る救済観

——内村鑑三と比較して——

水口隆司

はじめに

筆者は、カール・バルトの『ローマ書』を研究の対象としており、本論考では内村鑑三が、同じパウロの『ローマの信徒への手紙』（以下「ローマ書」と略記）について論じた『ローマ書の研究』と比較して、理解を深めたい。『ローマ書』は一九二二年に第二版が出版されて以来、それまでのドイツにおける神学理論から一線を画した、新しい「ローマ書」研究とされ著しい反響を引き起こしたもので、日本にも多大の影響を与えた。さらに、この第二版でのバルトの神に対する真摯な考察は、信仰義認を論ずる上で避けて通ることはできないと考える。バルトはトゥルナイゼン宛の手紙で「神は——まさに神であること」を強調し、呼びかけ、説明し、文章をつづって行った……そしてこの点に『ローマ書』第二版と第一版の相違点があるのだが

……<sup>①</sup>と両者の違いを述べる。彼は第一版を、前世紀の神学、即ち宗教主義的、自由主義的であり、人間中心のであり、神よりも人間のことを思う色彩が強く残っている<sup>②</sup>、と批判する。ここで第二版を、信仰義認の書と捉えるならば、第一版を、あくまでも第二版と比較してであるが、行為義認の書と捉えることも可能であり、神と人間の関わり方の観点からすれば、第二版は神主体であり、「神の義」即ち他力的、第一版は人間主体であり、「人間の義」即ち自力的<sup>③</sup>と、日本における仏教概念に即して理解することも仮説として許されるであろう。

これに関して内村鑑三がキリスト教を自力、他力の語を用いて、キリスト教は他力にして他力にあらず、自力にして自力にあらず、自力他力の両勢力をもっておのが救いを全うするものである<sup>④</sup>、と規定したように、伝統的な西欧思想の枠に捉われな<sup>④</sup>い理解も存在する。

以上のように、バルトと内村の「ローマ書」に対する取り組みを比較し、両者の特徴を明確にすることは、十分可能でありそれによって、新しい知見も得られるものと考えられる。

### 一 カール・バルトと内村鑑三を

#### 比較するにあたって

バルトと内村の両者を比較するにあたって、基本的な事実を確認しておきたい。

まず成立の時期であるが、バルトの場合、初版が一九一九年で、後に高い評価を受けた第二版は一九二二年の出版である。内村の場合は、一九二一年一月から一九二二年一〇月までの二年間にわたって東京で行われた講演会記録である。

次いで対象であるが、バルトの場合、学者、神学生であり、第二版の「序」で述べているように、この書物で扱われているものは「神学」である。一方内村の場合は、一九一九年から一九二八年にかけて東京で断続的に行われた聖書講演会の一環で、「聴衆はすべての階層を網羅し、キリスト教各派の信者、教会以外の信者、またみざから信者と称せざる者、また仏教の僧侶さえをもその内に見た」と述べる通りである。

又、バルトが三二歳（初版発行時）で、神学者としての経歴の嚆矢であったのに対して、内村は六一歳のまさに自己の最高潮の時期であった。

そして注目すべき事実は、執筆時まで双方共に相手の存在を

知らなかった、ということである。<sup>(8)</sup> 両者ともに独自に「ローマ書」に向き合い思索を深めた。

これらの比較に際して、キリスト教理解という立場から見れば、かなりの点で一致は予測されるが、内村が二つのJ（イエスと日本）として言及するように彼独自のもの、日本的なものを見出すことができれば十分に意義あるものとなるであろう。

### 二 カール・バルトの「ローマ書」理解

バルトが、第二版の「序」で次のように述べていることは、留意すべきである。

私はいまだかつて神学以外のものを論じるつもりはなかった。問題はただ「いかなる神学を！」ということである。<sup>(9)</sup>  
本書の中で読者を待っているものは、良かれ悪しかれ神学である。<sup>(10)</sup>

さらにバルトは言う。

「神は天にいまし、汝は地に在り」。私にとっては、この神とこの人間との関係、ないしはこの人間とこの神との関係が聖書の主題であり、同時に哲学の要旨である。聖書はこの十字架路にイエス・キリストを見る。<sup>(11)</sup>

ここでバルトは自己の「ローマ書」理解がイエス・キリストによる、神と人間との仲保であるとする。

和訳は神がわれわれになし給うたその御業であり、この御業は十字架にかけられて甦えり給うたキリストを仰ぐこと

によって成される。<sup>(12)</sup>

## 第一章「緒言」

バルトは序文に続いて、第一章「緒言」でパウロの「ローマ書」に沿ってイエス・キリストとパウロとの関わり、及びパウロのキリスト理解について述べる。それはキリストに対する信仰であり、キリストを使わず神御自身に対する信仰である。

手で造られた神殿に住む神々、人間の手で仕えられる神々、《誰かを必要とする》神々、すなわち人間に知られることを必要とする神々（使徒行伝 十七・二四～二五）は、みな神でない。<sup>(13)</sup>

そして彼は人々の言う神を、復活の此岸において人間が神と名づけるものは、神ならぬ神である、<sup>(14)</sup>として真の神と区別する。バルトは、われわれは神が未知のものであるからこそ（崇める）<sup>(15)</sup>ことができるのであって、人間の知恵の及ぶようなものは神でも何でもない、とする。このように人間は神を知ることができない。それゆえに神は、イエスを仲保者たるキリストとして使わした、と言う。

《われわれの主イエス・キリスト》、それがすなわち救拯使信である。<sup>(16)</sup>

救拯使信は《信仰》を要求する。信ずる者にとつてのみ、それは《救いをもたらす神の力》である。<sup>(17)</sup>

バルトの理解では、使信とはあくまでも神から人間に与えられるもの、即ち「賜もの」であって、人間が努力して得られるものではない。

## 第二章「人間の義」

バルトは第二章を「人間の義」と名付け、第三章「神の義」の前に置く。パウロが著し、バルトが理解した「人間の義」と「神の義」とはどのような関係であろうか。筆者はこの両者は、対として並んで置かれていないか、と考える。

いかなる人間の義も人間を神の怒りから免れさせえはしない！……いかなる状態も態度も、いかなる心性も情調も、いかなる洞察や理念も、自己の力で神の御旨に適いうるようなものはない！<sup>(18)</sup>

しかしバルトはこのように、最初から人間の力によって神の怒りを免れることはできない、とする。当時、パウロの周囲に居たのはユダヤ教徒であり、彼らは、ユダヤ民族全員が一致して律法を遵守して神の国の到来を待ち望むべきである、と考えていた。それがパリサイ人の説く「ユダヤ人の義」である。

予言者の説く神の義からパリサイ人の誇る人間の義が生まれる。けれども人間の義は本来不虔であり、不逞である。<sup>(19)</sup>

バルトはパリサイ人の義を否定し、人間の義を否定する。神の求める基準で律法を遵守することは、パウロを始めとして人間は誰一人として完遂できない。

《お前は、自分こそは神の審判を免れうるであろうとでもあてこんでいるのか》。それは人間の義の誤算であろう。<sup>(20)</sup>

当初、筆者は「人間の義」を「人間による義」、仏教的理解で

は「己の功德による自力」、「神の義」を「神による義」、即ち「阿弥陀仏の本願による他力」と類推して、対になる概念ではないかと考えたが、「神の義」と「人間の義」との圧倒的な差を認識するのみである。

### 第三章 「神の義」

バルトは「神の義」をこのように述べる。

神の義は《イエス・キリストにおける神の信実によって》  
啓示される。<sup>(21)</sup>

神の信実は、キリストがイエスにおいてわれわれと邂逅し給うことによつて実証される。<sup>(22)</sup>

神の義は、イエスをキリストであると信じる、その信仰の中に存在する。しかしイエスをキリストと信じることは、決して自明的なことではなく、理性的に理解することも困難で躓きの石となる。キリストに対する信仰は、まず神から最初に求められるものであり、理解した後に信仰するのではなく、義とされたから信仰するでもない。バルトは以上のことを要約して、信仰は飛躍であり、誰にとつても同様に不可能であるから、誰にとつても可能である、と言う。

神と人間とは同じでない。……われわれは決して神ではない。至上ではない。<sup>(24)</sup>

バルトはこのように神と人間との差を十分に認識した後に、人間の義について語る。

人間の義はただ神からのみ、然り、永久にただ神からして

のみ与えられる。<sup>(25)</sup>

人間の義は、その行為によつて神の注意を引いたり、さらには、ユダヤ教や他の宗教における「祈り」のように希望を述べて、神に影響力を及ぼそうとするものではない。

すなわちいかなる人間の《行為》も、世界におけるその意義のために神の嘉納を喚起したり、神の嘉納し給うものとして現世的な意義を主張したりしうるようなものは、根本的に何一つも存しないのである。<sup>(26)</sup>

バルトが「神の義」について出した結論は、人間にできることはイエス・キリストを信仰することだけである、とする。

### 三 内村鑑三の「ローマ書」理解

ではここで内村とキリスト教との関わりについて述べてみよう。日本人である内村にとつて、キリスト教とは如何なる存在であったのか。武士の子として江戸時代の儒教的、仏教的環境の中で育った彼は、札幌農学校で初めてキリスト教に触れた。その後アメリカで様々な経験をし、最終的に彼が得た信仰は、神による救済を待つ正統的なキリスト教であり、イエスの十字架による贖罪を信じる、極めて福音的なものであった。

主はあわれみに富み、わが罪を御子において消し去りたもうたこと、その御子に依り頼むかぎり、私は永遠の愛を離れることがないことを、今や知るからである。<sup>(27)</sup>

このように理解した内村が晩年に至り、それまでの信仰を総括

したが、今回採り上げる『ローマ書の研究』である。この間の事情について内村は同書の序文に次のように述べる。

その内、余が最も深く興味を感じしものはローマ書であった、使徒パウロによりて口授せられしこの書はキリスト教の真髓を伝うる書である。この書を解せずしてキリスト教を解することはできない。<sup>(28)</sup>

ではパウロの「ローマ書」に沿って彼の理解を見てみよう。

### 第一章「問題の提出」「異邦人の罪」

まず内村は講演の第一回目を「ローマ書の大意」と題する。ここで彼はキリスト教の本質を「人間の罪とイエスの十字架による贖罪」であるとす。

ローマ書はすなわち贖罪の理論的根底を開示せる大著である。……げにキリスト教の特色は再臨に存せずして、十字架に存する。<sup>(29)</sup>

まことに人の救われるはおこないによらず、信仰による。功なくして、ただキリストを信ずる信仰のみによりて、神の恩寵を受けて義とせらる。これイエスの十字架の贖罪あるがためである。<sup>(30)</sup>

このように内村は自己の信仰生活と、キリスト教理解に言及した後、講演の第一一回目を以降で異邦人の罪を論じる。

まことにこれ吾人の意表に出づることである。しかしながら福音はまず罪惡の指摘をもって始まる。罪の指摘あり、しかして罪の悔い改めありし後ならでは、救いの与えらる

る素地がない。<sup>(31)</sup>

人間は総べて罪人であり、その救済が宗教の目的である、という教義について内村はこのように告げる。

もし、おこないの優秀、人格の高貴、真理の完全なる悟得等をもって救いの条件とするならば、そはあたかもラジウム治療のごとく、少数者に限らるるものとなるのである。<sup>(32)</sup>

これを聞いて法然の『選択本願念仏集』の一節を思い出した仏教徒も多かったであろう。しかし彼は次のように言う。

弥陀宗の根底は慈悲であるが、福音の根底は「義」である。<sup>(33)</sup>

さらに「義」とは、「人の義」にあらずして「神の義」であるとして、重ねて人が努力の結果、獲得するものではなく神より賜るものであるとする。

### 第二章「ユダヤ人の罪」

パウロは、「ローマ書」の第二章で、人は救われるためまず罪を示されなければならない。救済の喜びを伝える福音は罪人たるを自覚する人にのみ与えられる、と述べる。そしてパウロは、この事実をまずユダヤ人に述べた。当時のユダヤ人は律法遵守による救済を期待していた。しかしパウロの真意は異なり、審判とそれに伴う恐れとが宗教の欠くべからざる要素であり、真の信仰によるのでなければ救われぬ、とする。

ここまで講演して、内村は追及の矛先を聴衆である日本人に

向ける。彼は、「キリスト信者と称し仏教徒と称うる者さえ、多くは来世と審判とに心を用いようとせぬのである」<sup>(34)</sup>と言い、源信僧都の『往生要集』の地獄極楽を引いて語る。神と来世に對する恐れを失った、とパウロがユダヤ人を断罪したように、内村は日本人を断罪する。

### 第三章「人類的罪」「神の義」

パウロはここで、まず人類全体の罪について触れた後に、そのような罪人に対する「神の義」を述べる。パウロは先に異邦人を罪に定め、次いでユダヤ人を罪に定めた。これで彼は世界のすべての人々を罪に定めたことになる。通常、罪に定められると、その後には罰が待っていると考えるのが普通である。しかしパウロと内村はここで驚くべき理論の転回を見せる。

さらば自己が罪人と定まりしはいとすべきことであるか。いな、これかえつて祝すべきことである。罪のなき所に救いはない。そして罪の感覚の浅い所には救いの喜びも浅く、罪の感覚の深き所には、救いの喜びも深い。<sup>(35)</sup>

「ローマ書」をこのように理解した内村は、ユダヤ人は律法遵守による救済を期待したが、その期待は叶えられなかった、と言う。律法は、道徳的完全を条件として救済を約束するものがあり、律法遵守によって救済を得られる者は一人もない。

さらに、人々の仏教理解に沿って、律法による自力的完成が不可能であることを述べる。

人のおこないによらず、全く弥陀の本願に基づくところの

他力救済の教えが、かく民衆の心にすみやかに透入したるは、人がみな本能的に律法による義の実現しがたきを感じせるがためであった。<sup>(36)</sup>

ではそのような律法による救済が望めないときに、与えられる救済とはどのようなものであろうか。

それがパウロの言う「神の義」による救済である。

「神の義」は、前回に講ぜしとおり、人の義ではない。人が自力をもって達成せし義ではない。<sup>(37)</sup>

ここにいうところの「神の義」は、神より人に賜う義である。換言すれば、神が人を義としたもう事である。この神の義が今やすでにあらわれたのである。そしてそれがキリストの十字架の贖罪に依拠することはいうまでもない。

それゆえに個人が日々の生活において求められることは、罪を犯さないことではなく、十字架のキリストを信仰を持つて仰ぐことである。そして内村は、この信仰のゆえに人は常に義とされる<sup>(38)</sup>と言い、ついに個人の努力を完全に否定する。

以上のごとく、救いはもっぱら神により、人によらぬ。信仰により、おこないによらぬ。実に絶大なる恩恵である。<sup>(39)</sup>

内村が述べるように、この「ローマ書」三章二一節から二六節の重要性について言及している神学者も多い。

#### 四 バルトと内村の類似と相違

これまでバルトと内村の、キリスト教及びパウロの「ローマ

書」理解を見てきたが、バルトが復活後のイエスを対象としてキリストの神性を重視するのに対して、内村はイエスによる十字架の贖罪に重きを置く。この信仰の対象となるのは「復活のキリスト」か「十字架上のイエス」か、ということは重要な問題であるが本論では言及を控える。

ここでは、バルトと内村が「キリスト教は宗教ではない」とし、キリスト教はいわゆる宗教を超越したものである、と同時に並行的に述べている事実注目したい。

なぜなら、宗教は、人間のある特定の属性であり行為であるという意味で、肉である。……肉は肉である。肉の中でなされること、すなわち、人間の方から神を目指してなされる企ては、本来《無力》である。<sup>(40)</sup>

バルトはこのように述べ、内村は次のように述べる。

いわゆる宗教に対しては研鑽努力が必要であるが、キリストの福音に対してはただ信仰の服従あるのみである。<sup>(41)</sup>

バルトと内村の理解した「ローマ書」の主旨は、「人が義とされる」ということはすべてイエス・キリストを信じる者に対する神の賜物である。啓示であり、福音であり、人間の行為にかかわらず神から与えられるものである、とする。すなわち、「キリスト教」は人間が努力して神を求める、換言すれば、人間が神を創り出すような個人に依拠する宗教ではない。このことについて後に来日したバルトをよく知るE・ブルンナーは内村の「無教会主義」を高く評価している。<sup>(42)</sup>

内村は、キリスト教における神と人との関係において、「キリスト教は、人が神を探る事にあらずして、神が人を求めたもう事である<sup>(43)</sup>」として、無教会主義を提唱したのだが、バルトも同様の結論を導き出しており、重要な共通点であると考ええる。

バルトと内村の両者の相違が顕著なのは、聴衆に対する表現である。内村は講演の中でも度々聴衆が理解しやすいように、日本の宗教的伝統である儒教や仏教の教えを引き話を進める。

キリスト教の専有教義は贖罪である。基より罪の赦免は仏教にもある。浄土真宗のごときは、これをもって生命とせる宗教である。さあれ、彼になくしてわれにあるものは実にキリストの十字架である。<sup>(44)</sup>

法然上人の『選択集』は、信仰による救いを証明せし大著である。……ただキリストを信じていっさいをまかせれば、それだけで、救いの船に乗せられて天の国まで連れられて行くのである。<sup>(45)</sup>

内村らの宣教活動により、日本でキリスト教が知られるようになったと言っても、一般の人々にはいまだ珍しい存在であった。大多数の人々は旧来からの仏教徒であり、世間の常識も仏教的なものであった。内村の「ローマ書」理解は決してバルトに劣らない、と考えるが、聴衆の質が根本的に異なる。バルトは『ローマ書』を執筆する際に最初から「神学」を述べたのに対して、内村は神学以前のキリスト教概論を述べざるを得なかった。彼は第一回目の講演に「ローマ書の大意」という題でパウ

ロの「ローマ書」の紹介から始め、第二回から第五回にかけて、聴衆にキリスト教及びパウロに対する彼の理解を伝える。

仏教に「対機説法」という言葉があるが、まさにその通り内村は現実の「日本の聴衆」を対象に講演せざるを得なかった。

おわりに

バルトと内村両者の、パウロの「ローマ書」に対する理解を、各々の著述を資料として比較検討してきたが、両者によるパウロの「ローマ書」の理解自体については、基本的な部分では共通点の方が多いと理解すべきであろう。ただ両者ともに時代の子であり、特に内村は時代的制約に加えて地勢学的な制約も大きかった。極東の島国でキリスト教の受容も明治以降であり、まだまだ全国に広く浸透しているという状況ではなかった。人々のキリスト教に対する理解不足という事実が厳然として存在しており、それが内村の制約となったことは否定できない。しかし、内村が仏教的な思想や言葉を使って広く民衆に語りかけた事実は、彼自身の幼少期からの内面的変化に基づくものであり、まさに血の通った言葉であると言ってよいだろう。

バルトの「ローマ書」理解と比較して、内村のキリスト教理解、「ローマ書」理解は当初仮定したような日本人的特徴というものはそれほど認められず、ヨーロッパの神学的伝統にも遜色のないものである。ただ、注目すべきは、両者共にキリスト教宣教を活動の起点としており、内村は晩年に至るまでその姿

勢を変えなかった。そのような事実を含め、両者における当時の聴衆との関わり方などの検討は今後の課題としたい。

(本論者は、第四四回大会における発表原稿に、加筆訂正したものである)

- (1) エーバーハルト・ブッシュ『カール・バルトの生涯』 新教出版社、一九八九年、一六九頁、下段。
- (2) ブッシュ 同上書、一六九頁、上段。
- (3) 峰島旭雄『比較宗教学と仏教』峰島旭雄選集3、北樹出版、二〇一三年、一七七―一八〇頁。  
彼は「自力、他力という表現は……宗教一般において純粹な学術用語としてではなく、一種の常識的レベルで持ちいることができる」と述べる。
- (4) 『内村鑑三全集』9 岩波書店、一九三三年、四九六―四九九頁。
- (5) カール・バルト『カール・バルト著作集』14 『ローマ書』吉村善夫訳、新教出版社、一九六七年、七頁、上段。『ローマ書講解』小川圭治・岩波哲男訳、上巻、平凡社、二〇〇一年、二〇頁。  
以下、引用は基本的に新教出版社版による。
- (6) 松沢弘陽編『日本の名著』38 内村鑑三 中央公論社、一九七一年、四九七―四九八頁。  
一九一九年の九月から一〇月にかけての「モーセの十戒」を皮切りに、その後ダニエル書、ヨブ記、ロマ書、ガラテヤ書、を講じ、一九二八年のイザヤ書研究まで継続して講演は行われた。
- (7) 内村鑑三『ロマ書の研究』角川書店、一九七〇年、三頁。『内村鑑三全集』28巻、岩波書店、一九八三年、三五六頁。  
以下、引用は角川書店版による。講演の筆記は、『聖書の研究』に一九二二年二月から翌年一二月まで毎月数講分ずつ連載された(岩波書店版全集原稿)が、完結後「補遺」「講演約説」とともに編集された、『ロマ書の研究』として東京向山堂から一九二四年に出版された

ものの再販である。なお、岩波全集版とは一部文字の異同がある。

- (8) カール・バルト『ローマ書講解 下』平凡社、二〇〇一年、五六四頁。

内村は一九二五年の日記で、初めてバルトの名前を挙げ、次のように記している。

「田島君の親切なる注意に由り、倫敦エキスポジトル雑誌に瑞西神学者カール・バルトの基督教観の評論を読んだ。」(富岡幸一郎解説より)

バルトの著述には、内村に関する記載は見当たらない、とされる。

- (9) カール・バルト 新教出版社、前掲書、六頁、下段 平凡社、前掲書、上巻、一九頁。
- (10) バルト 同上書、七頁、上段 同上書、二〇頁。
- (11) バルト 同上書、一三頁、上段 同上書、三〇頁。
- (12) バルト 同上書、一七八頁、下段 同上書、三四頁。
- (13) バルト 同上書、四五頁、上段 同上書、八二頁。
- (14) バルト 同上書、五〇頁、上段 同上書、九〇頁。
- (15) バルト 同上書、五九頁、下段 同上書、一〇四頁。
- (16) バルト 同上書、三七頁、上段 同上書、六九頁。
- (17) バルト 同上書、四七頁、下段 同上書、八七頁。
- (18) バルト 同上書、六八頁、下段 同上書、一二〇頁。
- (19) バルト 同上書、七三頁、下段 同上書、一二五頁。
- (20) バルト 同上書、七一頁、下段 同上書、一二五頁。
- (21) バルト 同上書、一一四頁、上段 同上書、一九六頁。
- (22) バルト 同上書、一一四頁、上段 同上書、一九六頁。
- (23) バルト 同上書、一一八頁、上段 同上書、二〇三頁。
- (24) バルト 同上書、一〇〇頁、上段 同上書、一七三頁。
- (25) バルト 同上書、一二七頁、上段 同上書、二一七頁。
- (26) バルト 同上書、一三一頁、上段 同上書、二二四頁。
- (27) 松沢弘陽編 前掲書、一七六頁、下段。
- (28) 内村鑑三 角川書店、前掲書、三頁 岩波書店、前掲書、28巻

三五六頁。

- (29) 内村 同上書、一九頁 同上書、一九八二年、26巻、一八頁。
- (30) 内村 同上書、二四頁 同上書、二三頁。
- (31) 内村 同上書、一一二頁 同上書、一〇一頁。
- (32) 内村 同上書、九七頁 同上書、八三頁。
- (33) 内村 同上書、一〇〇頁 同上書、九二頁。
- (34) 内村 同上書、一四七頁 同上書、一三二頁。
- (35) 内村 同上書、一六二頁 同上書、一四六頁。
- (36) 内村 同上書、一九〇頁 同上書、一七〇頁。
- (37) 内村 同上書、一九二頁 同上書、一七二頁。
- (38) 内村 同上書、一八七頁 同上書、一六八頁。
- (39) 内村 同上書、二一六頁 同上書、一九三頁。
- (40) カール・バルト 新教出版社、前掲書、三三〇〜三三一頁 平凡社、前掲書、下巻、二五頁。
- (41) 内村鑑三 角川書店、前掲書、六二〇頁 岩波書店、前掲書、一九八三年、27巻、一一〇頁。
- (42) 石原兵永「内村先生と無教会」鈴木俊郎編『内村鑑三と現代』岩波書店、一九六一年、一〇八頁参照。
- (43) 内村鑑三 角川書店、前掲書、六二〇頁 岩波書店、前掲書、27巻、一〇九頁。
- (44) 内村 同上書、二〇頁 前掲書、26巻、一九頁。
- (45) 内村 同上書、四三三頁 同上書、三四四頁。

(みずぐち・たかし、キリスト教神学・比較宗教学、同志社大学大学院博士後期課程)